



TITLE:

書評

AUTHOR(S):

CITATION:

書評. 日本外科宝函 1958, 27(5): 1160-1160

ISSUE DATE:

1958-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206691>

RIGHT:

書 評

Hermann, H.: Pathologische Histologie des peripheren vegetativen Nervensystems. Berliner Medizinische Verlagsanstalt. Abb. 50, S. 126 1956 (定価不明)

自律神経系の末梢構造については幾多先人の業績があるにもかかわらず、尚未開拓の分野を残しており、研究の進むにつれてむしろ問題は益々複雑化してゆく様にみえる。それは此領域での形態学的研究の結果は同時に生理学的、生化学的現象の説明を満足せしめるものでなくてはならず今日では未だこの要求をみたすだけの形態学的成果があげられていない。正常構造についての現況がこの様であるから、その病理組織学的研究に至つては更に問題が一層複雑で、従来此方面の病理学的研究は正常構造の研究にたずさわる組織学者の手に委ねられている場合が多く、従つて普通の病理学における様な体系は未だ樹立せられておらず、自律神経末梢の病理組織の研究をはじめめる者は少なからぬ困難に直面して来た。此時にあたり Hermann の綜説的著作を得たことは旱天に慈雨を得た如き感があり今後此方面の発展に裨益するところが多いものと信ずる。さきに Feyrter (1951) によつて同様の著書が発表せられたが同書では著者の主観が余りにも強く出すぎていて一般的記述に乏しいうらみがあつてもう少し中庸を得た著述の発行がのぞまれていたのであるが、Hermann の労作はまさにこの要求を満たしたものと云えよう。著者の意図とするとこれは従来諸学者の発表の総括をなすこと、ジャングルの複雑さに比すべきこの部門の手引き書となすことのみならず、更に不十分な研究方法を固執することによつて得られている研究結果を批判することにある。本書の内容は5章より成り、第1章は交感神経節細胞の形態的变化の章で核、細胞体、神経突起、副細胞胞合体、無神経細胞のあらゆる変化について詳述し更に Terplan 氏結節、神経節内結合、血管の変化について各1項を設け記述している。第2章は知覚神経節の病的変化、第3章では神経終末網の病理組織について評論している。第4章は各疾患における末梢自律神経の病理組織の章で各臓器別にその神経病理が詳しく紹介批判せられている。最後の章は末梢自律神経の病理と一般病理及び臨床との関連についての問題点を論じているが、この章には前4章に劣らず著者の努力が払われていると思われるのでこれについて簡単にふれてみたい。

A項は自律神経系の老若、健病に関する項でこのことは病理組織所見を記述するに当り誰もが一応断り書きする事柄であつて読者の注目する事項を含んでいるのであるが、著者の努力にもかかわらず満足な答を与えていない様に思われる。著者は末梢神経節の病理

所見を記載するに当つて変性神経細胞の比率を併記する必要強調し、生理的神経細胞変性の率は各年令を通じて最高12%とし、変性細胞と全細胞に対する比率によつて神経節の病的であるか否かの区別がつくとして確実に病的の場合は85%までが変性像の特徴をもつと云つている。一方個人差とか切除観察に供される時期によつて変性細胞出現率には相当の動揺があるので比率云々と云つても一線を劃する程の正確な判断の根拠とはなり得ない様である。B項は末梢組織の変化のその病機全体における意義についての項で、変性細胞の百分率の表現を強調するものゝその数値には上述の如く広い範囲の動揺があるので疾患を2群に分ち、1は今まですべての場合に変性せる神経細胞の多数見出されているもので冠動脈硬化症、胃潰瘍、幽門痙攣、レノ一氏病、胆石症、噴門痙攣、閉塞性動脈炎、硬皮症、紅色扁平苔癬、高血圧症、巨大結腸症が之に属し、他は少数の変性細胞しか発現されていないものと個々の例で多数発見せられたことのあるもので、これは伝染病によるものであるとしている。次に神経組織の変化が一次的のものか二次的のものかについては標本からは証明が得られず実験に俟つ外なしと云う。次に神経組織の変化の可逆性を論じ、核の変化については細胞体の高度の変化にもかかわらず外見上無傷の核のあることを述べている。次に変性のあらわれるまでの時間に関する研究は重要であることを論じている。それは変性の一過性可逆性の問題更には検査される時期による変性細胞出現率と関係をもつからである。疾患の際個々の神経節だけでなく全末梢神経系に変化が認められるとして著者はノイロン学説を否定し、更に交感副交感神経両系の間にみられる密接なる解剖学的関係、終末網における両系の統一関係、疾患時における両系の相似反応(変性)等から両系の間には結抗作用よりも協同作用のあることを認めている。全自律神経系に変化を示す様な疾患の際は内分泌系の検査を忽せに出来ないことも指摘している。C項では個人病理学についての項で、変性時にみられる個人差とはその量的差局所差、変性形式差を指すものであり、変性の種類から一つ特定の疾患を推定することは出来ない結論としている。上述の如く最後の章は魅力的問題を取扱つていのであるが明瞭な解答を与えているものとは云い難い。これはむしろ現況では当然のことであつてこの領域の研究に前途洋々たる余地の残されていることを示すものである。それはとにかくとして自律神経末梢の形態学的研究(正常、病理)にたずさわる者のみならず、その生理学、生化学の研究に従事する者も本書によつて多くの示唆が与えられるものと思う。(京都大学医学部外科学教室第2講座 井上諒)